

◆内閣総理大臣賞◆

〈学校教育部門〉

「田舎の農業高校生が主催する食育講座
—田舎からの発信 都会の小学生・お母さんへ—」

愛媛大学農学部附属農業高等学校（愛媛県）

〒790-8566 愛媛県松山市樽味3-2-40

■実践事例報告の概要

今、食育がブームであるが、現状では、大人が子どもに教え込むといったパターンが多い。これは、インターネットや携帯電話を使い、田舎の農業高校生と都会の小学生が交流を深めていく中で互いが食について学びあうことを想定し実践したものである。さらに、小学生の保護者を巻き込むことで、学校だけの限定的な食育ではなく家庭への広がりを持たせようと取り組んでいる。

実践のねらい

食育基本法が制定され、6月は食育月間として、さまざまな食育推進活動が行われている。しかしながら、その多くは大人が企画立案し、教え込む形をとっている。また、その場限りでのイベントとして取り組まれており、継続性がない。子どもたちの食の在り方については、大人の押しつけであってもいけないし、1度きりのイベントで変わるとも考えられない。ここでは、高校生と小学生という年齢差、都会と田舎の地域差を埋めるものとしてインターネットや携帯電話を使い、相互に学びあうということを考えた。高校生にとっては、小学生に教えるということで、より深い知識を得て、知識の伝達方法についても研究する。その過程で学ぶものが多い。一方、小学生においては、お兄さんお姉さんといった存在から学ぶということで、内容的にも受け入れやすいと思われる。さらに、小学生の保護者にも関わりを持っていくことで、限定的に終わりがちな食育を家庭の食の現場に広がりを持たせようと考えた。このような継続的な取り組みで、情報化時代の食育の在り方について、一つのモデルを作りたいと考える。

特徴・工夫・努力した点

次世代を担う高校生に食育講座を小学生やその保護者を対象として主催させ伝え教えさせる過程の中で、高校生は学びを深めるとともに、世代に応じたものとなるよう内容を工夫することとなる。また、異世代との交流によりコミュニケーション能力を高めさせることができる。小学生と高校生の学びあいは断絶しやすい世代の心を繋ぎ、優しさを育むこととなる。さらに、この食育の現場に保護者を取り込むことで、子どもの食の現場としての家庭で食の在り方が真剣に語り合われ、親子のコミュニケーションも深まると考える。

実践内容

まず、出発点として、都会の小学生に、農業についての疑問・質問を考えさせ、食の原点である農業について興味・関心を持たせた。それを田舎の農業高校生にメールで伝えて、高校生に学校での実習や農家や直売所の取材を通して、その疑問・質問についての答えを考えさせ小学生に対してプレゼンテーションをインターネットを通して行わせた。それを見た小学生には、インターネットでの調べ学習をさせて学習の深まりを持たせるとともに、さらなる疑問・質問を高校生にぶつけさせ

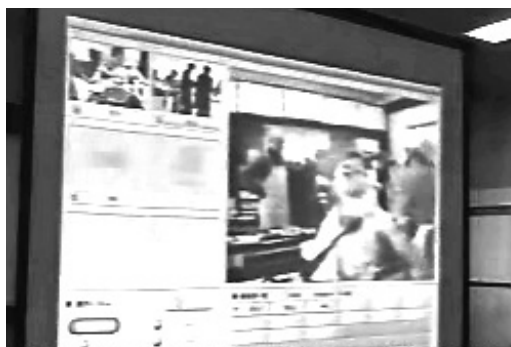


写真1・テレビ会議の画面に登場する小学生



写真2・テレビ会議に参加する高校生

るといった取り組みを複数回実施した。さらに、それを発展させて、小学校の食育の授業の際に、農業高校生が栽培した農産物を送るとともに、携帯電話のテレビ電話機能やインターネットを使い、生産の現場からのレポートをさせるなどリアル感を持たせた。

今後、最終段階として、小学校の実施している土曜講座で、小学生とその保護者に対して高校生が、プレゼンテーションも同時にできるインターネットテレビ会議システム（写真1・2）を使い、安心・安全な農産物を使った料理教室を行う。その際には、農業高校生が作った農産物に栽培履歴情報や原産地情報等を付加し、インターネットを使ってそれらが見られる状態にしておく。

実践結果

異世代の学びあいは、双方に学習意欲の向上をもたらした。最初はそれほどではなかったが、質問を受け答える、それがインターネットを通して顔の見える形に発展していくことで、互いを身近な存在として感じることとなり、真剣さ・積極さが増した。小学生の質問についても、自分たちの体験をもとにその解決のヒントを得ようとしていた。それに対して高校生は、農業高校で学んだ知識だけでなく、行動力を生かし、農家や直売所で取材を行うなどし、その結果をわかりやすく伝えられるよう工夫した。このような両者の真剣な取り組みはお互いを高めることにつながっている。

さらに、農業高校生が実際に作った農産物を情

報を付加して送ったこと、携帯電話のテレビ電話機能やインターネットテレビ会議システムを使ったことで、親密感・リアル感が増し、交流がさらに深まった。

地域の差、世代の差などいくつかのハードルがこのプロジェクトの関係者には存在するが、それをクリアするものとして、インターネットが存在することを改めて考えることができた。なお、料理教室については今後の取り組みとなるが、小学生の保護者からも歓迎の声があり、その日が来ることを関係者が心待ちにしているところである。

考察（今後の課題）

食育は、食の乱れを生じている現在の子ども世代に向けてのものが多く、その親の世代の乱れが子どもたちに大きな影を落としている。そういったことから、保護者世代をこの活動に取り込む意義は大きいと考える。実施に向けての条件整備もできているので、早い段階で実施していきたい。

現在は、小学校と高校、1対1の取り組みであるが、インターネットを利用することで、大きな輪を作っていくこともできる。この取り組みを一つのモデル化し公開することで、多くの学校が連携し、食育が行われることを期待したい。インターネットはそれを可能にするものであり、意義ある使い方として子どもたちに体験させることで、情報モラルを考えさせることにもつながっていくことと考える。